

2025年度 研究成果報告書

所属機関名	羽衣国際大学
申請者氏名	中島 智
研究課題名	遊び仕事が復興教育に果たす役割の研究：穴水町の復興ツーリズムに向けて

【研究の概要】

本研究は、2024年能登半島地震の被災地・石川県穴水町での世界農業遺産「能登の里山里海」を活用した復興地域づくりを念頭に置いたものである。自然災害被災地に残る「遊び仕事（マイナー・サブシステム）」が自然災害からの復興に向けた教育においていかなる役割を果たしているのかを、地域における文化の復興に関わる観光現象（復興ツーリズム）に着目して明らかにしていくことを目的として、復興ツーリズムと遊び仕事との関連性についての整理、遊び仕事を活用した復興ツーリズム事例の分析、地域協働による文化政策の視点から見た穴水町における遊び仕事を活用した復興ツーリズムの展開可能性の考察を行った。それらの結果を踏まえつつ、穴水町の遊び仕事従事者に対するライフヒストリー調査の企画を行うとともに、遊び仕事の継承と活用に資するための域学連携による聞き書き活動を行った。なおライフヒストリー調査については、申請者の事情により諸関係者との調整が遅れ、最低限の基礎的調査にとどまっている。一方、この調査訪問の際に、大学生が子どもの遊び支援活動に参加したが、これは復興ツーリズムの試みとしてささやかながら意義があったと推察される。

【研究の内容及び成果の詳細】

1. 研究内容及び成果（本研究によって得られた新知見、成果等）

1. 研究開始当初の背景

災害復興に関する国際的な議論の場においては、物的資産の復旧・復興だけでは不十分であり、災害の復興過程においてレジリエンスを促進し、生活や経済、環境の状態をより良く改善し、より災害に対して強靱な地域づくりを推進することが重要である、との指摘がなされるようになってきている。こうした「より良い復興（Build Back Better）」の議論については、近年日本の民俗学研究においても「文化におけるより良い復興」（加藤幸治『民俗学 パブリック編：みずから学び、実践する』武蔵野美術大学出版局、2025年、154-156頁）などとして言及されるようになってきている。ここでは、被災者自身が地域文化の掘り起こし活動を通じて、その地域で暮らすことの意味を見出し、それを語れるということが復興において重要であるとされている。そして、こうした文化におけるより良い復興とは、被災者にとって被災の経験を意味づけ、そこから再起へ向かおうとする学びのプロセスであるという点で生涯学習のプロセスそのものであり、その総体を復興に向けた教育すなわち「復興教育」として捉えることが可能であろう。しかしながら、こうした「文化におけるより良い復興」に関する議論において「遊び仕事」が取り上げられることはほとんどなく、自然災害からの復興教育という観点は必ずしも明示されていない。また、復興教育には、被災者の生活回復と被災地の復興地域づくりを促進することが期待され、またそこにおいて、特に地域文化の継承に関して、遊び仕事を、地域社会を中心に多様な主体を巻き込んで継承し、活用することが有効かつ重要であると考えられる。これは、多くの人びとに開かれた地域内外をつなぐ文化拠点形成の営みを意味する「文化的コモンズ」の概念と合致し、そこでの主体にはその地域に暮らす定住者だけでなく、旅行や仕事など様々な動機や目的で外部から地域を訪れる者も含まれているのではないかと。そして、そこには被災地域社会における生業・生活文化を介した人間同士の交流の姿を想定することができる。すなわち、自然災害被災地、ことに地方小規模町に残る遊び仕事をいかに継承・活用して、災害伝承や災害学習、災害からの復興につながる観光交流、すなわち「復興ツーリズム」を創出していくかが、現実的に大きな課題であることは間違いない。

このような状況下、穴水町では復興教育と関連付けた形でイサザ漁の継承について、域学・地域間の連携と地域住民の議論が始まりつつある。同町にはイサザ漁以外にも、世界農業遺産に認定された「能登の里山里海」に関わる遊び仕事が多様に存在し、それらの継承や復興地域づくりへの活用を図ることが急務である。また、こうしたテーマに、復興ツーリズムに焦点を当てて、「文化におけるより良い復興」のプロセスを描き出すことも重要な課題であるが、そうした取り組みは2025年に設立されたプロジェクト（任意団体）である「能登〇〇（まるまる）大学」における諸活動等によって緒に就いたばかりである。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究では、自然災害被災地に残る遊び仕事（マイナー・サブシステム）が自然災害からの復興に向けた教育においていかなる役割を果たしているのかを、地域における文化の復興に関わる観光現象すなわち復興ツーリズムに着目して解明することを目的としている。その際実践的には2024年能登半島地震の被災地である石川県穴水町のより良い復興を課題とし、学術的には穴水町における遊び仕事を活用した復興ツーリズムの展開可能性を文化政策の視点に立って考察するとともに、その実現にも資する穴水町の遊び仕事従事者へのライフヒストリー調査を実施するものである。

3. 研究の方法

本研究では、大きく以下の3つの方法で調査・考察を行った。

(1) 遊び仕事を活用した復興ツーリズムおよび復興教育に関する研究枠組みの提示である。復興ツーリズムおよび復興教育と遊び仕事をめぐる先行関連研究、遊び仕事を活用した復興ツーリズム事例の整理を通して、論点の明確化を図った。

(2) 石川県穴水町における観光交流および遊び仕事の現状把握である。文献調査および関係者に対する聞き取り調査を行い、おおむね1990年代以降の同町における地域振興としての観光振興の変遷を概略的に把握するとともに、2024年能登半島地震被災後の観光および遊び仕事の状況を網羅的に整理し、今後の課題と遊び仕事を活用した復興ツーリズムの展開可能性を地域協働による文化政策の視点から考察した。

(3) 穴水町における遊び仕事従事者に対するライフヒストリー調査の企画・実施である。聞き書き活動によって遊び仕事をめぐる語りを記録することで、遊び仕事を背立させる背景およびその実態を把握した。なお、当初はライフヒストリー調査には2～3名の対象者を想定していたが、筆者の事情により諸関係者との調整が遅れ、調査の企画・調整に係る時間的な制約が生じたため、1名に対する聞き書き調査を申請者の指導学生4名の参加も得つつ実施することになった。この訪問では遊び仕事の継承に向けた機運を醸成することと復興ツーリズムの実験としての意味を重視し、子どもの遊び支援活動にも参加した。所期の目的であるライフヒストリー調査の域まで到達していないが、自然と共に生きる暮らしの知恵や文化継承に向けた課題の概要を把握するとともに、実践的研究を通してささやかながら復興への貢献に努めた。

4. 研究成果

(1) 復興ツーリズムの定義

復興ツーリズムとは、自然災害の被災地を訪問し、復興への貢献を目指す活動である。すなわち、旅行者が被災地を直接体験し、地域の人びとと交流することで、災害の教訓と復興の過程・状況を学ぶことである。地域においては地域経済の活性化や災害伝承を行うだけでなく、地域文化の継承およびそれを通じた被災者にとってのこころのケアや生きがいの回復を促進する可能性も秘めている。

(2) 遊び仕事と復興ツーリズム

一方、遊び仕事とは、主に農山漁村にみられる生活に埋め込まれた労働のうち、経済的意義の小さな活動を「余暇」と「労働」の要素が混交した自然と関わる営みとして位置付けようという考え方である。もともと文化人類学や民俗学

などの分野で展開されてきたマイナー・サブシステムに関する研究蓄積の上に立って、伝統的な漁撈や狩猟、養蜂、山菜採りなどに注目しつつ提起・検討されてきた概念で、近年こうした周縁的な生業は、災害復興を含む地域づくりに関連して重要な活動である、との視点が提示されている。

このような遊び仕事の継承や活用が、それらが営まれてきた自然災害被災地での災害伝承や災害学習、災害からの復興につながる観光交流、すなわち復興ツーリズムと密接にかかわっていく問題であると筆者は考えているが、両者を関連付け、そのプロセスに焦点を当てた研究は、まだほとんど行われていない。しかし本研究では、遊び仕事は従事者の生きがいとなる余暇活動に近いものとして、同時に地域住民をはじめ広く人びとにもその食や風景が旬の文化として、親しまれてきたという意味において、観光交流との親近性を持つものと考え、「遊び仕事を活用した復興ツーリズム」という試論を提示した。その際、具体的には遊び仕事を活用した復興ツーリズムの国内事例を収集し、特に地方小規模町におけるその展開可能性について文献調査を中心に把握し整理を行った。

(3) 事例調査からわかる遊び仕事を活用した復興ツーリズムの特徴

中越地震の被害を受けた新潟県長岡市川口木沢地区では「フレンドシップ木沢」という地域団体が主体となって、旧木沢小学校を改修した宿泊施設「朝霧の宿 やまぼうし」（川口体験交流センター）を2010年4月に開設し、豊かな自然環境を踏まえながら「山菜ふれ愛ツアー」などの体験交流を進めてきた（2026年4月25日、26日に参与観察）。

2016年熊本地震の被害を受けた熊本県の各市町村では、同災害の発生以前からフットパスを活用した地域づくりを進めてきた。その端緒となったのは、2011年に下益城郡美里町において「美里町地域振興協議会」や「美里町商工会」がフットパスに関する取り組みを始めたことにある。その後2013年には「美里フットパス協会」を設立している。

また、宮城県南三陸町歌津地区では2009年から例年5月に地域の商店会を単位に、実行委員会形式で「伊里前しろうおまつり」というイベントを地域づくりの一環として行ってきた。これは、東日本大震災の被災によって2011年には中止されたものの、翌12年に地域外部のボランティアの協力も得つつ再開されている。

こうした事例に共通する要素は、①地域固有の自然環境を土台として、②地域外部の人びとと交流し、③その交流活動を地域文化の継承につなげている、ということになる。すなわち第1に、地域固有の自然環境を土台としているということであり、その地域に所与のものとして存在する自然環境を活用することに他ならない。それは、地域の自然環境で営まれてきた小規模な生業を通じた内発的な地域づくりの試みであるといえる。第2に、地域外部の人びととの交流を復興ツーリズムの一つの機能と捉えることである。少子高齢化と人口減少が加速する被災地において、観光交流は地域外部との接触機会を生み出す。復興ツーリズムは交流人口の獲得に目的があるのではなく、地域に関わる人びと（関係人口）の創出を目指している。それは、人びとの交流を通して復興地域づくりに向けた知識や人的ネットワークを形成しているのである。第3に、地域文化の継承を復興ツーリズムの目的に据えることである。復興ツーリズムはビジネス的手法を活用して開発・経営されるべきものであるが、それは経済効果の創出そのものを求めるのではなく、地域固有の自然環境や歴史に根ざした事業活動を通して地域文化とその基盤となる地域社会の持続を目的としている。

このように、自然災害被災地に残る遊び仕事はその従事者にとって身近な自然と向き合う生業の営みとしてだけでなく、地域社会にとってその地域の伝統を象徴する文化資源であり、さらには観光資源としての意味を帯びていることがわかる。つまり、遊び仕事を通して人びとの交流を生み出し、復興教育や地域づくりを推進することが可能となる。そのため、自然災害被災地において遊び仕事を、多面的な機能を有する復興地域づくりの資源として位置付けることは、きわめて重要であると考えられる。

(4) 穴水町における観光交流および遊び仕事の現状

次に、穴水町における観光交流および遊び仕事の現状把握を行った。1990年代以降の穴水町では、明治期に能登を訪問し、穴水にも立ち寄ったアメリカ人天文学者パーシヴァル・ローエル（1855-1916）の顕彰活動と関連しつつ「星空のまち穴水」を推奨するイベントの開催やボラ待ち檣の地域のシンボル化、地域の食文化をテーマに年間を通して行われるイベント「まいもんまつり」などが継続的に展開されてきたことに加え、近年では能登ワイン、のと鉄道、能登長寿大仏（2003年完成）、町のスポーツ環境などを地域資源として観光振興を図ることに努めてきた。

また、本研究では2026年2月25日当時の穴水町観光交流課長に対して、2024年能登半島地震後の穴水町における観光振興、ならびに地域資源としての狩猟採集の現状と課題に関する聞き取り調査を実施した。その結果をまとめると、以下の5点に要約できる。

- ①旅行者数は震災後、震災前と比べ、約90%減少している。
- ②誘客キャンペーンとして「今行ける能登」と題し、和倉温泉を拠点とした能登半島をめぐる周遊ツアーが実施され、県外からの観光客に回復の兆しが見られる。なおツアーには、のと鉄道による「のと語り部列車」が組み込まれている。
- ③宿泊施設の不足が深刻（農家民宿など18施設が営業中だが、主に工事業者が長期で利用しており、一般観光客の予約が困難な状況）である。
- ④ウド、タラノメ、ワラビなど野生山菜の採取・販売量について、町は実態を把握していないが、シーズン（春・秋）になると、町外からも山菜採りに訪れている。なお、こうした山菜は、ほとんどが自家消費用であると思われる。
- ⑤町内で狩猟される獣はイノシシのみであり、捕獲された個体は主に町内の加工施設でジビエ処理され、町内の観光施設や近隣自治体の拠点施設等でパック販売されている。一方で、イノシシや鹿の個体数が増加し、獣害が深刻化している。また、狩猟免許保持者は以前より高齢化が進行していたが、震災の影響等により70名から42名（うち第1種取得者6名、第2種取得者1名）へと大幅に減少した。さらに、既存処理施設の処理能力には限界があり、1日に複数頭が捕獲された場合に対応しきれない体制上の課題もある。

なお遊び仕事について、2024年度の個人助成「遊び仕事が復興教育に果たす役割の研究：穴水町の復興地域づくりに向けて」では、穴水町のイサザ漁の継承と活用に関して、その課題と展望を考察した。イサザの漁獲量の減少傾向や地震による河川環境の変化、漁をする人の被災・高齢化のほか、資源管理上の制度的な制約などによって漁の存続が懸念されながらも地域博物館活動やインターローカル型域学連携による持続的な漁の継承や復興地域づくりへの活用という方向を見い出した。

(5) 穴水町における遊び仕事を活用した復興ツーリズムの展開可能性

以上の結果を踏まえ、穴水町における遊び仕事を活用した復興ツーリズムの今後の展開可能性について地域協働による文化政策の視点から分析し、若干の考察を試みる。その際、「文化的コモンズ」の概念を援用し、行政や教育機関、地域社会に求められる課題を明らかにする。

①遊び仕事の再評価と継承

遊び仕事を活用した復興ツーリズムを推進していくためには、その前提として、地域文化としての遊び仕事への再評価と時代に合わせた継承ないしは保存の取り組みが求められる。そのためには、動植物の生態や生業活動の実態を示すデータを蓄積することことが不可欠である。また動植物の生息環境の保全や回復を進める必要がある。さらに地域文化としての遊び仕事の価値を伝える教育や啓発活動を行い、もし可能ならばそれらの機会も活かしつつ遊び仕事に従事する後継者を育成できれば、伝統的生業を継承でき、その持続可能性を担保できるとともに、次に述べる観光事業の新たな開発にもつながるであろう。

②遊び仕事としての復興ツーリズムの開発と推進

被災地での観光事業は、交流人口の増加にとどまらず、関係人口の形成や地域文化の継承を支える重要な仕組みである。地域内外の交流を促し、旅行者と被災者との対話の機会を得られることが、結果として被災地の文化継承や復興プロセスの共有につながる側面もある。これは、文化的コモンズの形成過程としての意味を内包している活動といえるだろう。したがって、遊び仕事を活用した復興ツーリズムにおいては、観光事業それ自体を遊び仕事と位置づけることが望まれる。そのためには、地域住民や地域に根ざした事業者を中心に行政や教育機関などが協働し、遊び仕事としての復興ツーリズムを開発し、推進していく取り組みが必要になるだろう。

③域学連携による聞き書き活動

2026年7月19日、穴水町川島地区に中田満さんを訪ねた。中田さんは長年、穴水町で四季折々の多様な生業に従事しており、昨年（2025年）4月27日に穴水町で域学連携事業として池田幸應金沢星稜大学名誉教授と申請者との共同主幹のもと、同町職員や地域住民の多大な協力を得て開催した「第1回あなみず・いさざ復興ミーティング」（主催：同実行委員会、後援：地域活性学会北信越支部、北國新聞社）でお世話になった方でもある。当日は午前10時30分から2時間程度、4名の学生と池田名誉教授の同席を得て、地域資源の持続性と文化継承のあり方について、イサザ漁の歴史と資源管理をめぐる課題をはじめ海産物の採取、イノシシ猟に至るまで年間を通じた自然との関わりと伝統保存食（発酵食品）をはじめ豊かな食文化のお話を伺うとともに、今後の遊び仕事ことにイサザ漁の継承に向けた意見交換を行った。その結果、季節ごとの小規模な生業と家族ごとに固有な伝統食文化の魅力、今後の継承に向けた課題が共有された。こうした能登の自然と共に生きる暮らしの知恵は、復興地域づくりのみならず、人新世における自然知能（Natural Intelligence）の可能性を考えるうえでの有効なメルクマールとなることも示唆された。（2026年7月13日、学生たちとの調査訪問に先立つ事前調査として申請者は中田さんのご自宅で聞き書きを行い、素潜り漁や山菜採りのお話を伺うとともにサザエの麹漬けやワラビの塩漬けなどの保存食を試食した。この調査訪問は、本調査の趣旨説明とご挨拶を兼ねたものであった。）

なお訪問初日（2026年7月18日午後4時～午後6時）、同町あすなろ広場にて開催された「あつまれ！ニューススポーツチャレンジ」（主催：穴水町教育委員会、協力：長谷部まつり実行委員会）において、同町教育委員会事務局、スポーツ推進委員、他大学学生と共に、本学学生4名と申請者がボランティアスタッフとして参加し、ウォータースライダーやモルックなどの運営サポートを通して子どもの遊び支援活動を行った。短時間ではあったが、学生たちは現地の人びととの交流を楽しんだ。折しも調査期間は町の夏祭りである長谷部まつりと重なり、参加した子どもたちの数人が地元の踊りである穴水音頭を披露してくれたことに感銘を受けたようである。これは、当初の計画には入っていなかったものの、本研究のいわば副産物として復興ツーリズムにおいては、等身大の相互交流が大切であることに気付かされたこととあわせてここに付記しておきたい。

2. 今後の研究の見通し

本研究では、2024年能登半島地震の被災地である石川県穴水町を対象に、世界農業遺産「能登の里山里海」に関わる「遊び仕事（マイナー・サブシステム）」が、自然災害からの復興教育および復興ツーリズムにおいて果たす役割と展開可能性を考察してきた。災害復興における「より良い復興（Build Back Better）」を文化面から推進するためには、被災者自身が地域文化の再評価を通じて再起を図る学びのプロセスと、地域内外の多様な主体を巻き込んだ「文化的コモンズ」の形成が不可欠である。今後は本研究の成果を踏まえ、学術的探求と地域社会への実践的貢献の双方を一層進化させていく。

研究面においては、穴水町におけるイサザ漁をはじめとする多様な遊び仕事の実態と特徴をより精緻に解明していく。イサザ（シロウオ）漁は全国各地で見られる伝統漁撈であり、申請者がこれまで和歌山県湯浅町等で重ねてきた実地調査の知見や他地域事例との比較分析を通じ、穴水固有の自然環境や生活文化における位置付けを浮き彫りにする。特に、これまでの聞き書き調査で見えてきた資源管理制度と現場の実態との乖離といった課題を精査し、伝統漁撈や地域資源を持続的に継承・活用するための具体的な企画提案へと結実させたい。また、今回の聞き書き調査だけでも、四季折々の生業と伝統保存食の世界を覗き見ることができたが、こうした生活文化も徐々に消滅しつつあるといわれる。「里山里海」資源の多様性を裏付けるものとして、こうした小規模な生業と家族ごとに固有な食文化をフェノロジーカレンダーなどの手法により記録し、公共的な形で可視化していくことも時間はかかるが、重要な課題と考える。

実践面においては、アクションリサーチおよび市民参加型手法を用いたレジリエントな復興地域づくりの具体化に注力する。2025年に開催した「第1回あなみず・いさざ復興ミーティング」を契機とした地元関係者、自治体、研究者との協力関係を活かし、イサザ漁やボラ待ち櫓をはじめとする地域固有の遊び仕事をテーマとした復興ツーリズムおよび復興教育のプログラム開発を模索・展開する。その際、域学連携による学生のボランティア参加や地域住民との等身大の相互交流活動を組み込むことで、観光事業者のみならず関係人口の創出や子どもの参加を含む地域コミュニティのエンパワーメントを図る。

今後は、以上のような復興ツーリズムを通じた文化的コモンズ形成の試みを継続的に実践・検証することが重要となる。浅学の申請者にできることは限られているが、大学での観光教育に従事し、研究テーマに関わる域学連携ならびに

実地調査を進めてきた者の責務として関係者と協力しつつ、復興ツーリズムが被災者の生きがいや価値観、遊び仕事の継承に与える影響、さらには復興地域づくりに関わる多様な主体へもたらす波及効果を多面的・学際的に検討し、被災地の未来に資する知見を還元していけるよう取り組んでいく所存である。

3. 本年度の学会発表・論文、刊行物・著書名等（今後、発表等を予定しているものも含む。）

〔学会発表〕

(1) 中島智 「「遊び仕事を活用した復興ツーリズム」という試論—地球倫理を基盤とした復興教育へ向けた視点から—」地球システム・倫理学会第22回学術大会自由論題発表予定（2026年11月28日麗澤大学：千葉県柏市）

〔雑誌論文〕

(1) 中島智 「遊び仕事と復興教育—シロウオ漁の継承を事例とした試論—」『羽衣国際大学現代社会学部研究紀要』第15号、2026年、67-78頁。※補足資料

(2) 中島智 「ローエルの日本文化論『NOTO』と穴水町の2024年能登半島地震からの復興」『地球システム・倫理学会会報』第21号、所収、2026年10月末発行予定